

平成 21 年 1 月 9 日

# 近世墓標と過去帳からみた松前と和人地

弘前大学人文学部人間文化課程

05H1005 浅水 優太

目次

第一章 調査研究の目的	1
第二章 調査地と調査対象資料	
第一節 調査地	1
第二節 調査対象資料	2
第三章 調査・分析の方法	
第一節 墓標	2
第二節 過去帳	2
第四章 分析・考察	
第一節 被供養者の出身地と居住地	2
第二節 階層性	3
第三節 死亡変動	4
第五章 結語	4

## 第一章 調査研究の目的

近世墓標はモノ資料でありながら、戒名や年号などの銘文による文字資料的側面を持ち、様々な情報を内包している。また、過去帳は大多数の人々に関する情報を持ち、墓標とリンクさせた分析が可能である。これらの情報は、当時の社会構造や葬られた個々人の人生を読み取る上で大変有用である。その反面、個人情報をも多分に含む墓標や過去帳の取り扱いには細心の注意と配慮が必要である。

今回調査を行った松前は、近世日本では例外的な「無高の藩」であり、経済の中心はアイヌとの交易や鯨漁であった。これまで米作地域での近世墓標調査・研究は多く行われてきたが、非米作地域での調査研究はほとんどなされていない。本研究では、非米作・無高である松前及び和人地の実態を、近世墓標と過去帳から考えていきたい。この調査研究が近世の松前・和人地を考える上での一つの参考になれば幸いである。

## 第二章 調査地と調査対象資料

### 第一節 調査地

#### ・松前藩の概要

松前（現北海道松前郡松前町）は本州を望む北海道最南端に位置する地域である。桜の名所であり、漁業や水産加工、観光事業などが盛んである。

古代より和人—アイヌ間で交易がみられ、中世には和人が本格的な進出を果たした（注1）。その後、多くの戦乱を経て武田信弘が和人支配の基礎を築き上げた（注1）。

近世になると武田氏は松前氏へと改名し、幕藩体制下で松前藩が形作られた。松前藩は福山城（松前城）を本拠とし、城下には港や寺町などが整備された。

寒冷な松前は米作に向かず、その経済基盤はアイヌとの交易や商船への課税、和人の漁業生産に大きく依存していた（注1）。そのため商場知行制や場所請負制度など他藩にはない様々な制度が成立した。

その後、鯨漁の盛況などによって松前はかつてない繁栄をみる。しかし、幕末になると藩政の動揺や幕府の崩壊に巻き込まれ、やがて松前藩は終結を迎えたのであった。

#### ・和人地の概要

和人地とは和人居住区の事であり、松前藩による和人支配とアイヌ交易の独占を目的に設定された（注2）。和人地は福山城（松前城）を中心に西の西在・東の東在に分けられ、一般に西在は熊石（現熊石町）を、東在は亀田（現函館市）を境界にしたという（注1）。和人地のおもな産業は鯨漁であり、松前・和人地の繁栄に大きく寄与した。

※注1 『松前町史 通説編 第一巻上』1984 松前町史編集室 松前町

※注2 榎森進 1982 『北海道近世史の研究—幕藩体制と蝦夷地』北海道出版企画センター

## 第二節 調査対象資料

本研究では松前藩福山城下寺町における法幢寺・法源寺・寿養寺の三ヶ寺を調査した。これら寺院はいずれも曹洞宗であり、中世から続く古刹である。なお、法幢寺は松前氏の菩提寺として有名である。分析には、法幢寺・法源寺・寿養寺の近世墓標 1817 基と過去帳に記載された被供養者 13432 人のデータを用いている。

## 第三章 調査・分析の方法

### 第一節 墓標

調査対象は「慶応四年（明治元年/1868 年）以前の被供養者に関する何らかの文字情報が読み取れる墓標」とし、年号の確認ができない墓標と明治二年以降の墓標は調査対象から外した。ただし、同一墓標内に近世の年号と近代以降の年号がともに存在する場合は調査対象に含めた。また、年号が不明であっても、過去帳内に被供養者が確認できる場合は調査対象に含めた。

現地調査では、墓標を清掃したのち、高さの計測や文字の読み取り、デジタルカメラによる撮影を行い、カードへ記録していった。

### 第二節 過去帳

過去帳に記載された、慶応四年（明治元年/1868 年）以前の被供養者を調査対象とした。過去帳から読み取った情報はいくつかの項目に分け、分類整理した。

## 第四章 分析・考察

### 第一節 被供養者の出身地と居住地

ここでは主に過去帳から被供養者の出身地及び居住地を検討した。

被供養者の出身地に注目すると、南部・津軽・秋田に被供養者が集中することがわかった（図 1）。年代ごとに被供養者の出身地は変化し、17 世紀は南部から日本海側の近江周辺までの分布であったのが、18 世紀には日本海側から四国・九州まで広がり、19 世紀には江戸周辺の太平洋側にも分布するようになった。これらは西廻り航路や東廻り航路の発展・定着と深く関係しているものと考えられる。

このような被供養者の大半は成人男性であり、武家・商家への奉公や蝦夷地への出稼ぎ、あるいは水主・船頭などがその職業として見られた。

一方で南部・津軽・秋田などには女性も多く、中には出稼ぎに来ていたと思われる被供養者もみられた。江戸や越後・庄内にも女性が多くみられたが、その大半は施主の「妻」や「母」であり、地域によって渡航目的に差異がみられた。

また南部・津軽・秋田に関して村落単位の詳細な分析を行ったところ、下北半島～津軽半島を中心に被供養者数が多く分布していることがわかった（図 2）。確認された村落は主に漁村や港町であったが、陸路上の村も一部見られた。

被供養者の居住地に着目すると、福山城下を中心とする半径 10~20km 圏内に集中することがわかった（図 3）。これは法幢寺・法源寺・寿養寺の檀家範囲と考えられる。この檀家範囲には距離的要因の他に、地元寺院の有無・本末関係などが絡んでいるようである。

地域別にみると、福山城下は近世を通して被供養者数が増大傾向にあり、人口が拡大し続けたようである。和人地でははじめ西在の被供養者数が多かったが、19 世紀には伸び悩み、東在に追いつかれることがわかった。これは近世前期における西在の発展と、近世後期における西在の停滞・東在の発展を示していると考えられる。

墓標を持つ者は、はじめ福山城下居住の被供養者に限られたが、やがて城下周辺へも広がっていったようである。

## 第二節 階層性

ここでは戒名・俗名・施主名・墓標の有無から松前における階層性を検討した。

戒名に着目すると、近世初頭は少数の高位戒名が主体であったが、17 世紀半ば以降には被供養者数が増加し、「格」の低い戒名へと主体が変化することが分かった。これは檀家制度の浸透・定着によって庶民の被供養者が増加したためと考えられる。

しかし 18 世紀頃になると、被供養者の主体がワンランク上の戒名へと変化した。これは鯨漁による庶民の経済力向上や寺院財政の困窮などが原因と推測される。

子供の被供養者では、童子・童女という戒名が年齢に限らず広く使われていたが、19 世紀以降には孩子・嬰兒などの新しい戒名が流行・定着していった。

俗名・施主名に注目すると、当初は苗字・名のみが主体であったが、徐々に屋号が増加することがわかった。これは他国商人の土着化が大きな要因と考えられる。

戒名と俗名・施主名の関係性に着目したところ、苗字・屋号に高位戒名が集中していることがわかった。戒名によっては苗字・屋号で用いられ方が違い、武家と商家の戒名にはある程度の区別があったと考えられる。

一方で信士・信女は苗字・屋号・名のみを問わず高い割合で存在し、戒名による階層性には必ずしも明確な線引きがないことも分かった。

被供養者の墓標の有無から階層性を検討したところ、「墓標を持つ者」の大半は福山城下居住の成人であることがわかった。また、戒名・俗名・施主との比較から、「墓標を持つ者」は「墓標を持たざる者」よりも階層が高いことが判明した。

しかし松前では「墓標を持たざる者」の方が圧倒的に多く、特に 19 世紀半ば~幕末にかけて「墓標を持つ者」と「墓標を持たざる者」の人数差が大きく広がった。これは松前へ来た人々の多くが「墓標を持たざる」漁民や下層労働者であった可能性を示している。

福山城下で「墓標を持てた人」の割合を求めると、近世全体では 30%、19 世紀に限っても 32%と低い割合であった。これは低位階層者が多いことや、人口流動性が高いが為に定着性の強い墓標が普及しにくかったことなどが原因ではないかと考えられる。

なお、分析全体を通して「被供養者の格」は和人地よりも福山城下の方が高かった。

### 第三節 死亡変動

ここでは主に過去帳から死亡者数の変動や季節性を検討した。

各年の被供養者数を見ていくと、はじめは少ないが徐々に増加し、19世紀以降は年によって大きな変動があることがわかった。

各月の被供養者数に着目すると、夏季に集中することが判明した。夏季における被供養者数の増大は、主に疫病によるものではないかと思われる。

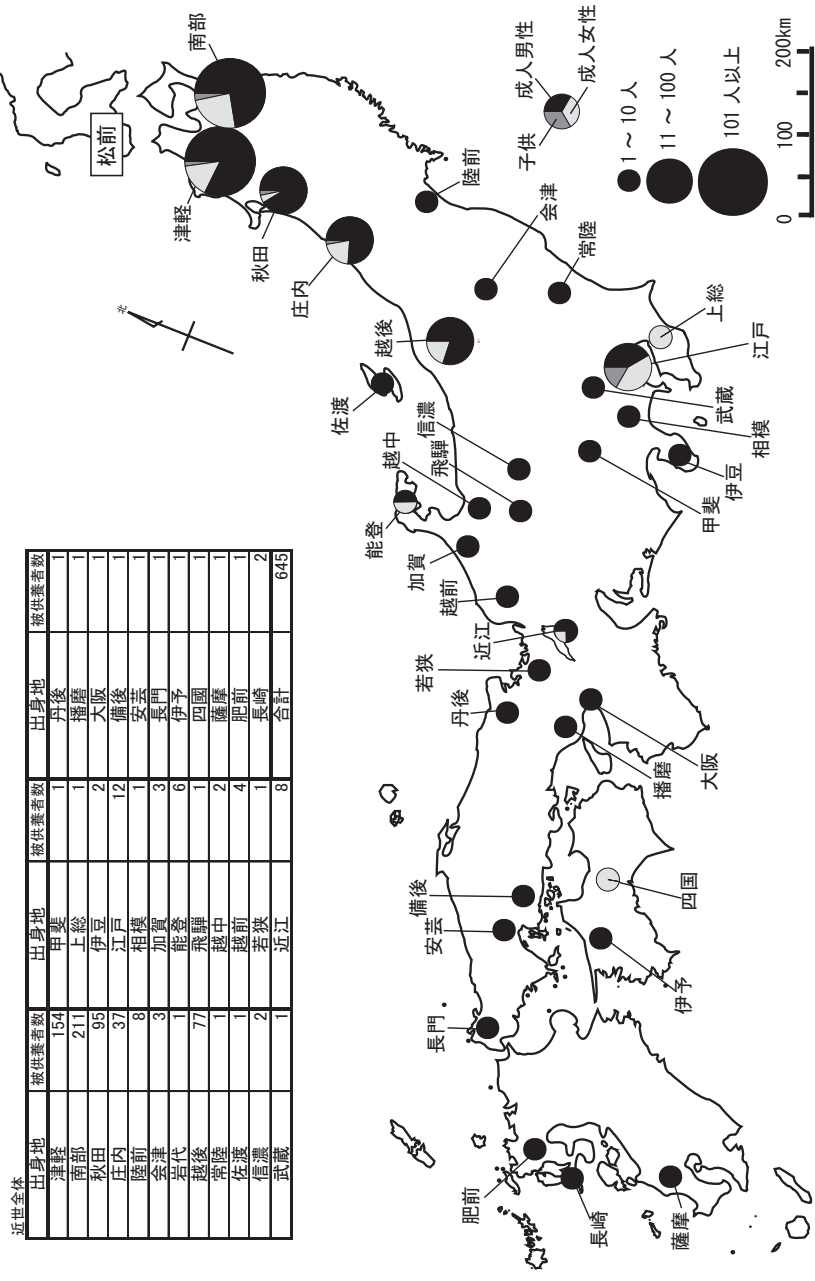
1600～1868年を四等分し、被供養者数の各平均値を求めた。平均値が2倍以上の年を死亡クライシス年と仮称して分析を行ったところ、平常年よりも被供養者の夏季集中が顕著になることがわかった。死亡クライシス年の発生要因には飢饉や疫病が考えられるが、中には関係性が明らかではない年もあり、単なる誤差の可能性も考えられる。

## 第五章 結語

北海道松前町における近世墓標・過去帳の分析を通し、松前と和人地の発展をみることができた。一方で、松前と全国の結びつきや、航路の発展などもうかがう事ができ、特に松前と津軽・南部・秋田の結びつきが強く感じられた。

また、他国商人の進出や漁民の経済力向上などもみることができた。さらには、松前における人口流動性の高さや定着性の低さを示すことができたのではないかと思う。

これらの分析結果は、従来の文献史学的な研究の内容から大きく外れることはなく、既存の歴史観を裏付ける結果となった。しかしその一方で、考古学でしか解明できないような「新事実」を発見するまでには至らなかった。今後は、より考古学の持ち味を生かした研究が望まれるだろう。



出身地	被供養者数	出身地	被供養者数	出身地	被供養者数
津軽	154	甲斐	1	丹後	1
南部	211	上総	1	播磨	1
秋田	95	江戸	12	大坂	1
庄内	37	相模	1	備後	1
陸前	8	加賀	3	安芸	1
会津	3	能登	6	伊予	1
岩代	1	飛騨	1	四国	1
越後	77	越中	2	薩摩	1
常陸	1	越前	4	肥前	1
佐渡	1	若狭	1	長崎	2
信濃	2	近江	1	合計	645
武蔵	1				

図1 過去帳からみた被供養者の出身地分布（近世全体）

出身地	被供養者数	出身地	被供養者数	出身地	被供養者数
今別	2	大間	1	岩館	3
不綱知	1	大畑	16	八森	16
小泊	4	佐井	4	椿村	1
蟹田	1	釜谷	1	落合	1
脇本	1	木ノ部	1	能代	7
十三	1	川台	1	藤琴	1
金木・野崎	6	関根	1	飛根	1
木造	1	田名部	4	大館	7
鯨ヶ沢	9	赤川	2	茂内	1
深浦	9	脇ノ沢	6	船川	2
大浜	2	川内	4	土崎	3
青森	14	野辺地	5	久保田	2
後范	1	五戸	2	仙北	2
小湊	1	八戸	4	本庄	1
金沢	1	三戸	3	石脇	1
飯詰	2	鹿角	9	塩越	16
板柳	1	花輪	12	関村	1
青女子	1	盛岡	3	山本	1
藤崎	1	鎌ヶ崎	2	横手	1
悪戸	1	宮古	12	湯沢	1
弘前	16	土沢	1	不明	26
八反田	1	不明	118	秋田合計	94
相馬	1	南部合計	211		
高田	1				
不明	75				
津軽合計	154				

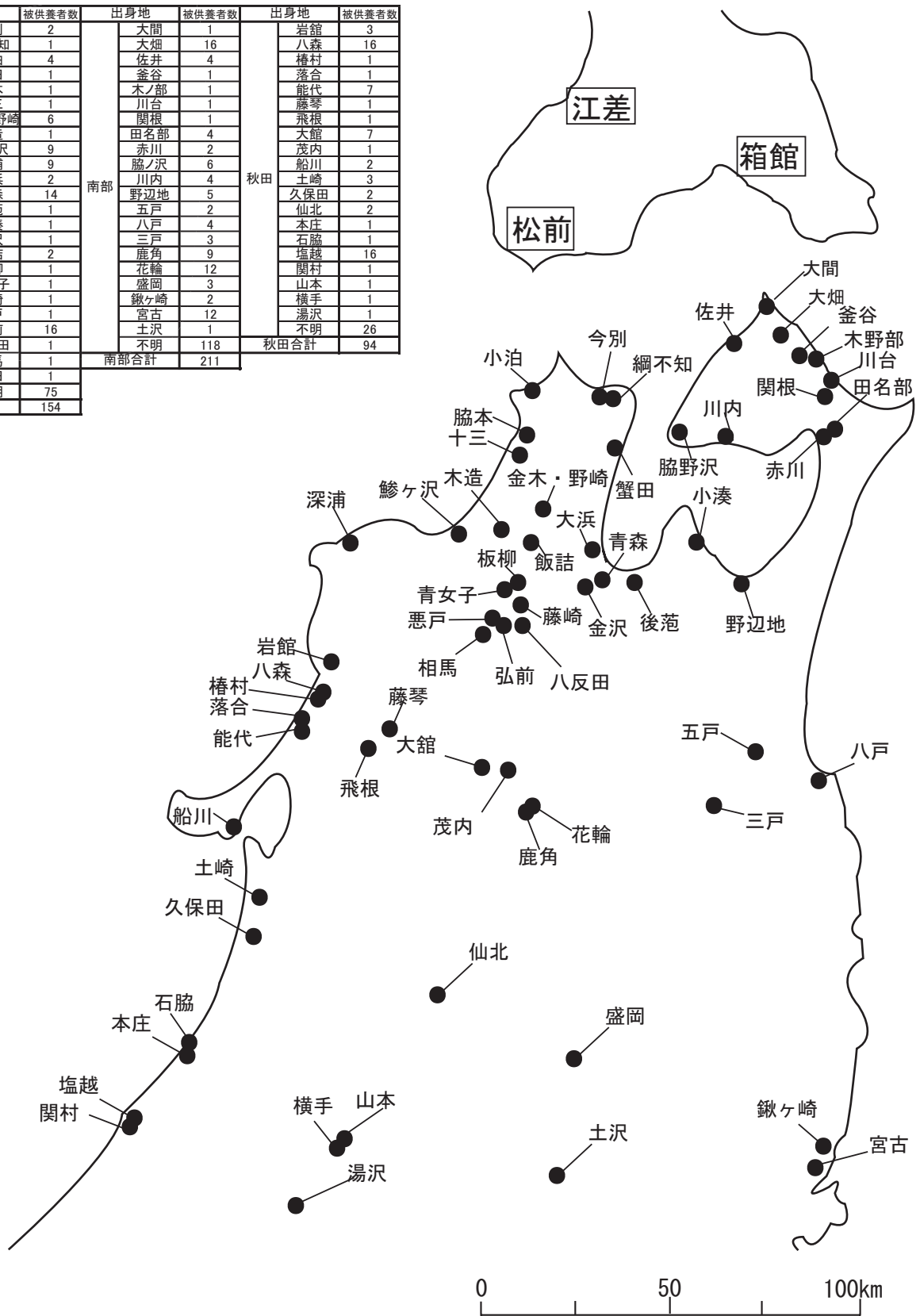


図2 過去帳からみた被供養者の出身地分布詳細（近世全体：津軽・南部・秋田）



近世全体 ※( )内は墓標を持つ被供養者数

福山城下		東在	
居住地	被供養者数	居住地	被供養者数
福山城下	12769(1965)	有川	1
		荒谷	173(8)
		泉沢	10
		市之渡	1
		大沢	164(1)
		大野	1
		及部	298(3)
		釜谷	1
		亀田	10
		木古内	9
		小谷石	13
		札蒔	1
		白府	58
		知内	14
		炭焼沢	165(1)
		福島	35
		富川	6
		戸切地	2
		七重	3
		根森	56(2)
		箱館	68(4)
		宮歌	8
		茂辺地	2
		湯の川	1
		吉岡	36(3)
		礼髭	56
		脇本	6
		東在全体	1198(22)
		総計	15921(2051)
西在全体	1954(64)		

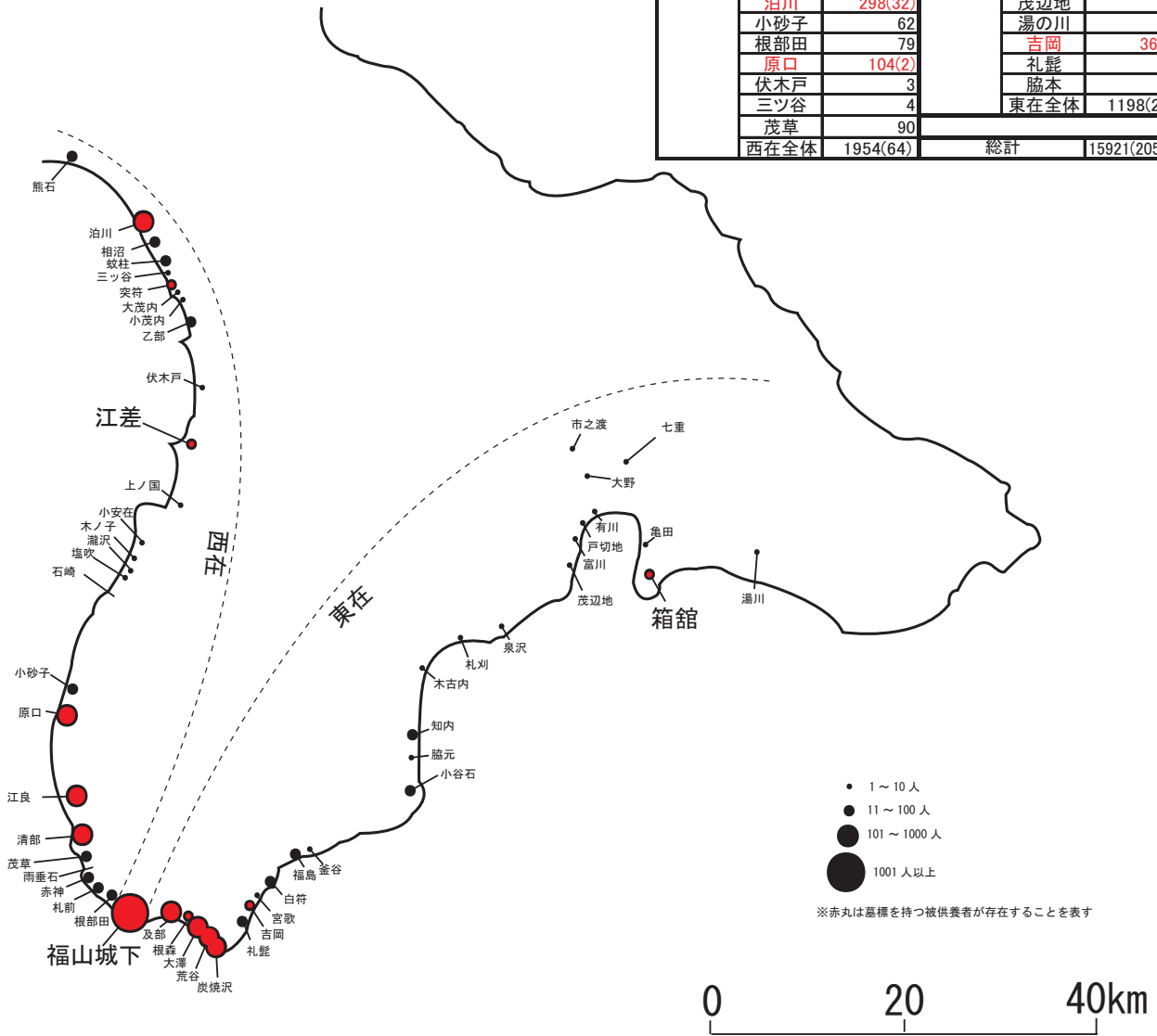


図3 過去帳からみた被供養者の居住地分布（近世全体）